読売歌壇

小池　光　選

大型店でやっと見つけて駆け込みし砂漠の泉喫煙ルーム　大東市　若槻　豊彦

【評】たばこに対する世間の目がきびしくなって、愛煙家は居場所がない。やっと見つけた喫煙ルームに駆け込む。「砂漠の泉」とはまさにそうだろう。実感こもる。

わが妹に命せまれり大きなる朝日輝き登り来たれり　市川市　安田　恭子

【評】妹のいのちがいよいよになった。大きな大きな朝日が登ってくる。生きる者、旅立つ者、すべてがこの太陽のもとにある。スケール大きく、また厳粛である。

なにもすることがなければ頬杖をついて大宰の真似をしてみる　秦野市　星　光輝

【評】頬杖ついて遠くを見ている大宰治の有名なポートレート。無為のひととき、ちょっと真似してみた。むろん太宰にはなれないが。

亡き母の大好きだった孔雀草庭にまた咲き秋の深まる　盛岡市　舟山　治男

面接に行った帰りの秋の空一歩一歩ね道を歩むよ　鳴門市　楠井　花乃

九十三回夏を知るわれB29の重低音がまだこびりつく　成田市　神郡　一成

戦国の天下を取った武将等はしっかりとした筆跡残す　生駒市　宮田　修

三階の校舎窓から十月のメタセコイヤのてっぺんを見る　仙台市　三角　清造

自転車の荷台にちょこんと乗りし子は今や中二と小六の父　大阪市　黒田　道子

五十年欠かさず日記つけし父、再入院の日で終わってた　横浜市　桃井　恒和

栗木　京子　選

パソコンとコピー機ありて糸綴じの手づくり歌集七部仕上がる　川西市　片岡　順子

【評】手書きではないが、糸で丁寧に綴じ合わせたことで貴重な手づくり歌集が出来上がった。自分用の他に短歌の仲間にも謹呈するのだろうか。「七部」に味わいがある。

昼はほぼ別行動の左右の手寝る前にそっと合わす掌　町田市　永井　悦子

【評】起きているとき、忙しく動いている両手。さまざまなものに触れるものの、互いに合わさることはほとんどない。寝る前の合掌からは感謝と祈りが静かに伝わる。

降りるべき駅を過ぎたりのんびりと運ばれてゆく淀川の上　奈良県　刈田　陽子

【評】乗り越してしまったのだろうか。だが慌てても仕方がない。淀川を渡ってゆく情景によって、風通しのよい歌になった。

このごろは歌会に添へるワインあり饒舌になりて歌評ふくらむ　福岡市　近延のぶ子

Tシャツもパーカーも居る今日の朝ラジオは流すガザのニュースを　狭山市　奥薗　道昭

スメタナの生誕二百年記念「わが祖国」に聴き入る我は平和な市民　東京都　青山　繁

這い這いをする子の全身ことばなりママの所へことばが進む　岡崎市　三上　正

茹で栗を絵本の栗に重ね置き子は栗を知る二歳の秋に　和泉市　松浦　杏子

里親の心は一つ何があれ愛して行かむ子の未来へと　一宮市　今出　公志

空と湖の間に鳶の十数羽十月の風澄みたる朝に　大津市　松井　美枝

俵　万智　選

亡くなっていると思っていた人を訃報が一瞬生き返らせる　松原市　たろりずむ

【評】訃報で久しぶりに名前を聞き、逆に「ご存命だったのか」と思うという「あるある」だ。その業績などを思い出す感覚が、結句にみごとに表現された。

働く人のために働く人がおりカタログに夜間配達の文字　大和郡山市　大津　穂波

【評】日中は受けとれない「働く人」に配慮したシステムが、さらに「働く人」を生む。現代社会の便利と労働について考えさせられる。

土の量リューベに話す作業着の工事現場の語彙にときめく　鴨川市　春木　敦子

【評】リューベとは1㎥のこと。業界用語の問答無用のカッコよさ。G音の連なる第三句以降からは、現場の活気が伝わってくる。

トイレットペーパーを買うだけなのに幸せそうに見えるふたりは　堺　市　一條　智美

かたくなに白墨と呼ぶ先生が西日の先に白墨を置く　豊中市　葉村　直

コスモスは少しの風に揺れてをり妻を独りにしてはいけない　竹原市　岡元　稔元

ふるさとの屋根の多くは赤瓦新酒だ呑めよとおとうとの言ふ　市原市　井原　茂明

裏側に廻る舞台の戦死者はつぎつぎ起きて着替えに走る　大阪市　原　拓

お供えの柿熟れ過ぎてこんなにも生の気配に満ちる六畳　千葉市　芍　薬

探していますポスターの顔写真のような選挙候補者の顔　稲沢市　伊藤　茂

黒瀬　珂瀾　選

観客に見守られつつおさな児が浄瑠璃のごと注ぐ牛乳　金沢市　塩本　抄

【評】この浄瑠璃は人形浄瑠璃のことで、観客は親や家族だろう。幼児がぷるぷる震えながら大きな牛乳パックを抱えている。ハラハラする緊張感がまるで人形劇の見せ場のようだ。幼児のぎこちない動きが実に愛らしい。

その人の死後の時間は生きてゐる者が見上げる雲かも知れず　岐阜市　後藤　進

【評】死者の時間とは、生者にとっての悠久の奥にあるのだろうか。空を見上げて亡き人を思うひととき、雲の白さが目にまぶしい。

流星の賑やかになる満天に百鬼夜行の監視衛星　横浜市　阿部　和己

【評】夜空に流星群を楽しむ。だが、あの輝きの幾つかはどこかの国の軍事衛星かもしれない。夜空のロマンが薄れゆく現代です。

傘立てに入らず横に置かれたる折り畳み傘わが人生は　前橋市　西村　晃

筒先に木綿袋を吊りさげて手押しポンプはいつも垂れてた　大和郡山市　四方　護

カー押して散歩をじつつ国民の義務の選挙を終へて帰れり　小美玉市　松山　光

敗戦を知るも兵らは習性に背かず聞けり消灯ラッパ　山口市　岡田　貞義

町内の若手と言はれ早や八十路使いつ走りもいよよ円熟　柏　市　藤嶋　務

ポータブルトイレ洗浄の音は午前五時つぎつぎ響き病棟めざむ　天草市　野口久仁子

ふるさとへ握るハンドル紅葉の峠越えれば母十三回忌　仙台市　田口　隆広

◇投稿規定◇　はがき１枚に未発表の１作品。住所、氏名（ふりがな）、電話番号を明記。◇他の媒体、選者への二重投稿は厳禁です。選者が添削することもあります。〒103・8601、にほんばし蔵前郵便局留、読売歌（俳）壇、○○先生（希望選者名）係または読売新聞オンラインから　◇毎週月曜日に掲載　右の影絵はにほんざる